



# ピッポ新聞

2010  
1  
No.249

子どもの本専門店

## ピッポ

年間購読料 ( 送料込み ) 1500円

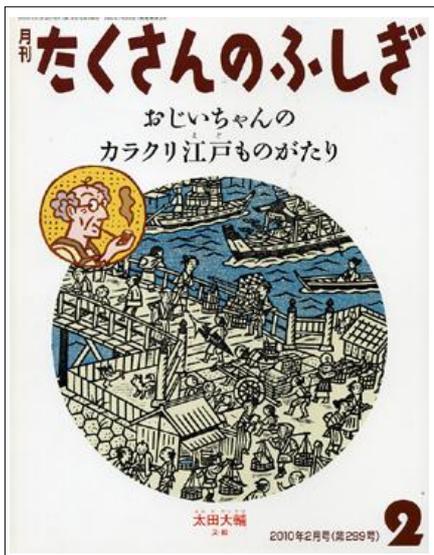
編集・発行 伊藤俊男

〒424-0886 静岡市清水区草薙1-6-3

TEL & FAX 054-345-5460

URL <http://www.pippo.co.jp>

E-mail [itoh@pippo.co.jp](mailto:itoh@pippo.co.jp)



発売中止になった『たくさんのふしぎ』2月号

**福音館書店さん、「販売中止」すれば事足れりですか？**

一部の新聞に載ったそうですから、ご存知の方も多いと思いますが、先ごろ福音館書店は『おじいちゃんのカラクリ江戸ものがたり』（たくさんのふしぎ2月号）の販売を中止しました。一度発売した雑誌を途中で販売中止にするということは余程のことがあったのだと思います。今月は、このことについて考えてみます。

ぼくがこの販売中止を知ったのは、福音館から届いた販売部長名の一通のファックスでした。確かそれは12月28日だったと思います。

2月号が配本されてきたのが、クリスマス前で、普段は『こどものとも』『かがくのとも』などの福音館が発行している月刊誌は、3日前後に

入荷（例えば、3月号でしたら2月の3日前後ということです）してきますが、2月号は年末年始の休みの都合でしょうか、毎年年内に配本されてきます。この配本された月刊誌は、いつも年が明けてから店に出すことにしています。ですから今回の『たくさんのふしぎ2月号』も梱包したまま置いてあったのです。

ファックスの内容は、たくさんのふしぎ2月号『おじいちゃんのカラクリ江戸ものがたり』の販売を中止してくれというものでした。そのわけは、おじいちゃんが孫たちの前で、パイプで喫煙する場面が繰り返し返してでることや、本文中にもタバコ礼賛の内容があると、読者（？）から指摘され、これが、MHOのタバコ規制枠組み条約に違反するし、内容も子どもの受動喫煙を助長すると抗議を受け、福音館はこの指摘をうけいれたうえで、販売中止に踏み切ったということが書かれていました。

この福音館の緊急販売中止の措置に、ぼくは少し驚きを感じました。いや、驚きと言うよりも唖然としたと言った方が良いかもしれませぬ。

というのは、出版社たるものが、読者（？）から少しばかり抗議されたからと、こつこつ簡単に発売を中止してしまつてよいものだろうかと思つたのです。この場合の発売中止とは、『おじいちゃんのカラクリ江戸ものがたり』を絶版にするということなのですからね。言い方を替えれば、版元自らが物理的に読者の前からこの本を消したことです。

ぼくはいかなる本にも主張（思想）が有ると考えています。今回の場合は、何ら出版社として

の反論を試みることなくその圧力に屈してしまつたことになりませんか。  
出版という行為は、言論の自由を守るための最前線の一つだと、ぼくは認識しています。ですから、今回福音館書店が、公に何らの反論も試みずに発売中止にしたことは、とても奇異に感じました。

### 不買運動に屈したのか？

福音館書店は、『たくさんのふしぎ2月号』を一度出版という形で世に問うたわけですから、なぜ反論もしないで相手に屈したのでしょうか？これで表現の自由・出版の自由を守れるのですか？

福音館書店にも労働組合があると聞いていますが、組合は民主主義社会に於いて最も大切なことのひとつである表現の自由の危機だと認識して、発売中止を決定した会社に抗議をしないのですか？

少なくとも読者に説明する責任があるとおもいますが、いかがでしょうか。

それに、作者はこの本を絶版にすることを、納得したのでしょうか？作者の太田大輔氏にだって、思いや反論があるのではないのでしょうか？読者はそのことだつて知りたいのです。

その後、知人からのメールでこの問題について、いろいろの人がブログで感じたことを発信していることが分かりました。ここからはそれを考慮入らせて書いていきます。

そもそもこの問題を提起（抗議と不買運動を提唱）したのは、青森県の小児科医のようですね。

そのブログ（現在なぜか削除されています）によると、「たくさんのふしぎ」2月号の内容は、定期購読者の一人として、また禁煙運動家として看過しがたいということから始まり、子どもたちに及ぼす影響が大きいから、2月号の発売をただちに中止して、すべてを回収することを要求するもので、同時に不買運動を提唱しているのです。

さらに、おそらくはこの小児科医の所属するNPO法人の日本禁煙学会の理事長名で十二月二十七日づけで、文部科学大臣・全図学校図書館協議会会長及び理事長・日本図書館協議会会長・福音館書店社長（連署）宛に「タバコ礼賛『たくさんの不思議』(マ)2010年2月号」の不当性について」という抗議文兼要求書が出されました。その内容は先の小児科医の主張と似たなものでした。

これに対して、福音館は即日発売中止で応えたのです。翌日の28日には、冒頭紹介したように、当店に福音館書店から販売中止するように要請がとどいたのでした。

この福音館の対応に対して、小児科医は自身の12月28日付けのブログで次のように書いています。

「たくさんのふしぎ」2010年2月号は本日発売中止となり回収されることが発表されました。購入された方は、下記

の案内にしたがつて返品してください。  
(子どもに悪影響があるための処置でするのでそのままおもちにならないようお願いいたします)

迅速に対応して出版社にとって重大な決定をされた福音館書店に敬意を表します。定期購読も再開し、不買運動は中止いたしました。……

このブログでは、福音館の素早い処置に敬意まで表して、かつ定期購読も再開したとありますが、それ以前、福音館書店社長に宛てられた抗議及び要求書では、かなり激越な調子で、こんなことを書いています。

……は全編にわたってストーリーとは関係なく喫煙シーンが頻りに描かれ、本文にもタバコ・パイプを礼賛する内容が記されており、子ども向けの絵本としてはあり得ない恥ずべき絵本となっております。

販売する価値がないどころか悪影響を及ぼす絵本を定期購読だからといって無理矢理買わされる筋合いはありません。

上記の処置がなされなければ、ネット上および様々なチャンネルを通じて福音館書店の不買運動を続けさせていただきます。

と、記した上で、さらに続けて、

私自身も子ども頃から子ども向け出版社として伝統ある福音館書店がこのような形で存続の危機を迎えたことを大変残念に思います。

.....

というよなことが書かれています。これを正當な抗議行動と捉えるか、言論封殺の「脅し」と捉えるかは、それぞれの考え方や立場で異なると思います。これを読んだとき、事あるごとに大きく報じられる海環境保護団体シーシェパードの行為を連想しました。ぼくは、あの実力行動は、「角を矯めて牛を殺す」行為だと感じているのです。今回の小児科医と禁煙学会の行為もそれに通じるものを感じました。もとより「クジラを守れ」にも「禁煙運動にも」ぼくは賛成なのですが.....

## 問題なのは、 福音館のとった措置

.....

ところで、どうしても腑に落ちないのは、今回の福音館書店の対応です。どうしてこんなに素早く販売中止をきめたのでしょうか？

朝日新聞の発売中止の報道記事は、締めくくりによりに伝えています。

.....

米山博久・月刊誌編集部長によると、発売直後の25日、購読している小児科の医師らから「喫煙を推奨したり、子どもの

受動喫煙を肯定したりしているのではないか」などと指摘された。同社は「子どもの本の出版社として配慮に欠けた」として販売中止を決めた。

米山編集部長は「喫煙シーンを著者に描き直してもらい、改めて出版する予定」と話す。

記事によると米山編集部長（あれっ、この名前は、確か今泉氏の時にも登場しましたか？）は、相手の言い分を簡単に認めています。編集の責任者として自社の出版物と著作者を守る意味で、反論することが表現の自由を守ることだと言う認識が全然ないようですね。

そもそも出版の自由・表現の自由ということも米山氏ほどのように認識しているのでしょうか。ぼくには米山氏がこれまで「表現の自由」という事を腹に据えて出版したことが一度も無いのだと思います。

そうでなければ、「喫煙シーンを著者に描き直してもらい、改めて出版する予定」などと言うはずありませんもの。これらとても重大な発言だと思えます。

小児科医には、何ら反論を試みることもせず屈服しておきながら、逆に、編集者という立場で今度は「書き直させる」と言っているのですね、これを言い換えれば、今度は表現の自由を侵害する側に立つことを公に宣言しているのです。

これでは作者はたまったものではありません。一緒に闘ってもらえると思っていた

編集者に裏切られただけでなく、今度は「書き直し」という形で、自分の絶対的権利である表現の自由を、力関係（編集社と作者）によって侵されるのです。

これが本作りの過程に於いての、助言や要請であるならともかく、福音館書店として、既に発売という形で世に送り出した本についての、担当編集部長の公式発言であることが、ぼくは問題だと思つのです。

## 「ピッポ新聞」は再び福音館書店に回答を求めます！

さて冒頭にも、今回の福音館書店の対応の素早さに驚き、かつ啞然としたと書きましたが、その最大の理由についてお話しすることで、今月号の結論とすることにいたします。

ご存知のようにピッポ新聞は、動物学者・今泉吉晴氏の「ピアンキの名作」くちばし』二つの謎を解く」を十五回に渡って連載してきました。その過程で疑問に対してはその回答を、批判に対しては反批判を、誤訳に対してはその訂正などを今泉氏とピッポ新聞は福音館書店に求めてきましたが、現在にいたるまで一度として回答をいただけておりません。無視され続けてきました。そういう体験者から見ると、今回の福音館の「発売中止」の素早さは異常に写ったのです。

この違いはどこからくるのでしょうか？小児科医のように、シーシェパードまがいの抗議行動と、文部科学大臣他に抗議及び

要請文を出し、メディアを動員すればよいのでしょうか？

まさかね！

言うまでもなく、今泉氏の批判論文の内容は、そんなトリッキーな手段を必要とするほど薄っぺらな内容などでないことは、これを読み続けてくれた読者が一番ご理解していただいていることだと思います。

ここに大雑把ではありませんが、福音館書店に質問及び回答をお願いする点を再び掲載します。

1、貴社自身が、かつて『くちばし』という、ピアンキの作品を田中かな子氏のすぐれた訳で出版したにも関わらず、田中友子氏の訳で新たに出版したのはなぜですか。

2、作品中、随所に誤訳や誤った解釈(科学的な意味に於いても)があると、今泉氏は指摘していますが、いつこれを改めるのですか。または誤っていないということなら、これに対する反論をお聞かせください。

3、田中友子氏訳で福音館から計3冊の絵本を出版しています。今泉氏は批判文のなかで原書とは大きく違えて訳者が勝手に内容を変えてしまった点も明らかにしています。特に『どろぐがなくて』のひどさは、どういふことなのでしょう。

4、今泉氏は、一年半以上にわたったこの連載を通じて、ナチュラリスト・ピアン

キの作品世界の素晴らしさと、深さを教えてくれましたが、田中友子さんの訳はこれを台無しにしてしまっていることが明らかです。読者にとってこれほどの不幸はありませんし、原著者ピアンキにも失礼だと思えますが、福音館さんはこれをどのようにお考えでしょうか。

5、以上の事を踏まえて、福音館書店はいまだ発売を継続中の、田中友子氏訳の『くちばしどれが一番りっぱ？』『おしゃべりなもり』『どろぐはなくて』の3冊の発売を中止にするつもりはありますか。

米山編集部長さん、9月号の15回をもって今泉氏の連載は終了しましたが、ピッポ新聞にも読者はいます。今でも時々ピッポのお客さんや、ピッポ新聞の読者から、福音館からは回答がありましたか？というお尋ねをいただくのですよ。読者は今泉氏の問題提起に福音館が回答する事が当然だと思っているのです。ぼくは、版元はどんな小さなことでも、読者の疑問や問題提起には必ず応えてくれるものだと思っていました。

米山さんご自身朝日新聞の取材に対して「子どもの本の出版社として配慮に欠けた」と心えているではありませんか。しかし、こちらが問題点を指摘した本はいまだに売り続けています。あの3冊の本が継続して

売られていることは「子どもの本の出版社として配慮に欠けた」ことではないのですか？一日もはやい回答をお待ちしております。

さて、この稿の最初の見出し「・・・販売を中止すれば事足りるのですか？」と揚げて、実は「事足りていない」「ことをさまたま書いてきたのですが、「事足りてない」具体的な例を最後にあげて終わりにします。

ぼくは毎月、市立図書館に福音館の月刊誌を納品しているのですが、「たくさんのふしぎ2月号」が発売中止になったことを伝えたところ、司書から「ではこの2月号は欠番になるのですか、それとも後日別のものが2月号としてくるのですか？」と、問われたのです。これに対して、答えることができませんでした。

どういふ答をすれば良いのか、教えていただけませんか。

今月に入ってから三度、福音館から連絡が届きました。一度は社長名でお詫びと販売中止に至った理由が、二度目は書店の在庫をすべて福音館が買い取ることが、三度目は郵送で着払いの送り状と当店の銀行口座をかきこむ用紙が送られてきましたが、図書館の司書のような問いや、読者に答える回答はついで送られてきません。なぜそんなに早く、2月号をこの世から消す必要があるのですか？

(終わり)